

農協共済の礎を創った『ボーリング推進』

J A 共済連 全国本部 総務部（前・調査研究第二部） 平沢 真琴

農協の共済事業が、昭和23年に“北の大地・北海道の北見”から始まったことは、ご存知だろうか？

北海道は厳寒の地であり、荒野であった。農民は経済的にも極度な困窮状態にあった。そんな中、農村における長期的な自己資金の蓄積、自立自賄い資金の造成、営農・生活の不時の支えを目的に、共済事業が始められた。

農協共済は、民間の生保・損保（営利事業）とは異なり、経済的弱者といわれる“農民”を救済することを目的に創設され、非営利事業として展開されてきた。

農協共済の創業当時は、農協の役職員が先ず加入（率先加入）し、その役職員の勧めによって、組合員農家に普及されたが、その進度は遅かった。農村部においては、共済や保険に対する意識が低く、推進といっても、まさに啓蒙活動そのもので、開拓者が不毛の大地に種を蒔くのと似た努力が必要であった。多くの役職員は、朝出勤する前に3～4戸の採契を済ませ、昼間は自分の持ち場の仕事をし、退所後再び4～5戸の採契にあたった。

農協共済の普及推進は、このような役職員によるポツポツ推進から始まり、その後、集中組織推進～集中役職員推進～恒常推進との併用推進を経て、現在では「LA」といわれる推進のプロがその中心を担っているが、農協共済の礎を創ったのは紛れもなく『ボーリング推進（集中組織推進）』にあると言える。

そこで、農協共済の礎を創った『ボーリング推進』とは、どのような推進であったかを紹介してみたい。

1. 「ボーリング推進」の元祖は京都

農協共済が事業を開始して10年が経った昭和33年、京都府は共済事業推進研修会において、「短期強烈主義による事業推進」を提唱した。これは、まさに集中組織推進のことで、この研修会の後に農村のあらゆる農民組織を動員して共済事業を推進した結果、京都府が昭和33年度の長期共済新契約で全国一になった。これは、翌年に全共連が開発し、全国に広がった「ボーリング推進」に直結する有効な推進方法であった。

◆なぜ「集中組織推進＝ボーリング推進」なのか

一言でいうならば、「日時・人・物」の集中を総称して「集中組織推進」と名づけた。そして、ひとつ徹底的に共済の需要を掘り起こそうと「掘り起こし運動＝ボーリング推進」と呼ぶようになった。

「ボーリング推進」は昭和34年、それまで各県が現状に即した方法で思い思いに推進していたものを、全共連がその粋をまとめて一つの形にし、全国的に展開した。

2. ボーリング推進の手順

ボーリング推進の概略は次のとおりである。

午前…組合役員会を開催し、共済推進を決議し、具体的な実施計画を含めた意思の統一を図る。その席上に申込書を持ち込んで、役員はまず率先加入する。

午後…部落のリーダー（部落長・青年部・

婦人部など)を集めた推進協議会(推進大会)を開催し、農協共済が村づくりに果たす大きな役割についての認識を高め、村全体を共済推進の雰囲気に取り込む。その場に集まった大勢の人たちに申込書を配布し、全員加入してもらう。

夜…部落座談会を開催し、農家経済における共済の必要性を集団の場で徹底させ、共済需要を喚起する。

翌日…推進協議会・部落座談会に引き続いて、早朝(5時)から戸別訪問をする。昨晚の部落座談会ですでに話してあるので、加入金額を決めて、ハンコをもらうだけにする。

このねらいは、まず共済思想の徹底的な浸透を図って、共済に対する潜在的な需要を掘り起こし、それを満たすことにおかれた。この過程を短日時のうちに実施することによって、いったん顕在化した需要が沈潜することを防ぐのである。

ボーリング推進方式は、農協での組織的な意思結集が重視された農協独自の推進方式で、かつ、組織運動を具現化したものである。また、この方式は、結果として短期間で早期に目標を達成すると同時に、事業量の急速な拡大と、事業内容の充実により大きな役割を果たした。

こうして、その成果を通じて農協の組織が再認識され、同時に農協経営を積極姿勢に転ずる契機をもたらした。

3. ボーリング推進の三つの特色

(1) 推進から採契までを、ごく短期間(3~4日程度)でやり遂げてしまう。

これを「日時の集中」という。日時の集中は反面、多数の人を短い日時に動員するという「人の集中」が必要になってくる。

推進協議会(推進大会)は多数の人の意思を統一し、組織化するために必要なのである。

(2) 推進のための準備を万全にする。

推進が成功するかどうかは、推進協議会や部落座談会にいかにより多くの人集めができるかにかかっている。しかも、3~4日の間に多数の人を動員するわけだから齟齬をきたさないような万全な準備を必要とした。

同時に、相手である組合員が、当然と思いつくような村中の雰囲気を作り出す準備が必要である。

(3) 推進の重点を各種の会合におき、戸別訪問は共済契約申込書の取りまとめ程度に考える。

推進協議会(推進大会)を開催した後、部落座談会を省略して、直ちに戸別訪問にとりかかった場合の結果は決して良くない。それは、戸別訪問に多くの時間がかかってしまうからである。

4. ボーリング推進成功のポイント

その1 率先加入

ボーリング推進を運動として展開するためには、まず、組合長・専務をはじめとする常勤役員が率先して加入する必要がある。そこで重要なことは、率先高額加入(率先して、高額な契約に加入)をすることである。すなわち先頭に立つ者が模範を示すことである。最初に加入する者の契約金額が、あとに続く加入者の基準になってしまうからである。

次に、農協職員が加入する。続いて、推進員となる青年部・婦人部さらに農事組合長や班長である。

このように、部落座談会や戸別訪問に参加する農協役員・組織の代表すべての者が率先加入するのである。

その2 推進協議会（推進大会）

推進協議会（推進大会）に出席する人は、農協青年部・婦人部の役員をはじめ、農事組合長・部落長・班長などである。ここには多くの人数を確保する必要がある、5戸～10戸に一人といった割合であった。そして、ここに集まった人が、推進員となり戸別訪問の先導役になったのである。

その3 部落座談会

部落座談会の成否は、即ボーリング推進の成否とって過言ではない。その成否の鍵を握るのは参加率である。

部落座談会への出席は、夫婦同伴が原則であった。座談会の中で、共済加入の必要性和共済の仕組みを説明し、十分理解と納得を得たら、その場で夫婦が相談して加入の意志決定をし、全参加世帯の加入を促す必要があった。いわば、集団説得方式であった。そのためには、その場に夫婦が揃っていることが重要であった。

もしも、夫婦のどちらか一方しか出席していない場合は、翌日の戸別訪問のとき、改めて説明する必要も出てくることから、一軒の家で長時間を費やしてしまうことになり、非効率的であった。ボーリング推進の特色は、訪問時間が短いことであった。

＜プレゼント（土産）作戦＞

部落座談会の参加率は、土産が有るか無いかで大きく差が出た。土産があれば80%以上の出席率が確保できたとも言われた。また、婦人層の参加率向上には土産は欠かせない武器になった。

千葉県松戸市農協では、出席者への土産として、「バケツ一斗入りを一個」配布したそうである。大バケツで共済契約を汲み上げるとの意味を込めてのことだった。これは「松戸方式」として全国に広まった。

＜小道具（掛図）＞

部落座談会では、共済事業の趣旨や共済の内容を説明し、共済加入への理解をしてもらったうえで、全戸に高額加入してもらうことが主眼である。そこで説明がしやすいように、そして聞く側も理解しやすいように「掛図」が活用された。

掛図は、模造紙に説明したい内容を図で示したもので、農協職員の手によって作成された。例えば、「なぜ農協が共済事業を行うのか」「生命共済の仕組みはこうです」…といったことが図示されていた。

この掛図は、共済のみならず、農協の理解、信頼の向上にも貢献した。

その4 予約推進方式

事業の初期の段階においては、実契約（即時契約）によって推進が行われていたが、農家の共済掛金の払込みを助けるために、米の収穫時期（米代金収入時期）を成立日とする「予約推進」を進めた。予約申込みの時点で契約申込書は作成するが、申込年月日を記入しないでにおいて、本契約（掛金の払込日）の時に記入するやり方であった。多くの県では、預貯金の振替によって、共済掛金を収納する方法がとられていた。

この予約推進方式は、民・簡保には見られない、契約者のニーズを汲み取る農協共済の特色を発揮した推進方式であった。

5. 県共済連・全共連の推進支援

(1) 共済連職員も連日の奮闘

ボーリング推進が全国で行われ出した当初（昭和34年）、共済連職員は貴重な（あるいは主たる）戦力であった。このボーリング推進方式を定着させるために、共済連職員が陣頭にたって、現地研修を兼ねながら農協の事業推進を指導・援助する傾向が強かった。

共済連の男子職員は、新入職員も含めてほ

.....

とんど全員が、土日・祝日も無いような状態で農協に出ずっぱりであった。彼らの役割は、部落座談会での講師が中心であり、新入職員などは一夜漬けの猛勉強で、汗だくの奮闘であった。当然のことながら、翌朝の戸別訪問でも大活躍した。

(2) 全共連職員の推進支援

昭和33年度は、「農協共済総ぐるみ加入特別運動」を展開した。この運動は、農協共済全戸加入運動であり、農民組織と農協が一体感をもった早期推進運動であった。

この頃、全共連の普及担当職員が共済連職員と一緒に、農協管内の普及推進現場まで出向いて、支援活動を行った。その中で開発された推進方式が、農協運動と組織的推進を組み合わせた集中組織推進、すなわちボーリング推進である。その開発に関わり、各県を飛び回り指導に当たった愛称・沼伝こと沼森伝治班長（故人）は推進の神様とも言われた伝説の人であった。

そして、ボーリング推進全盛の時代は、全共連も男子職員のほとんど全員が農協まで出かけて行くようになった。

6. エピソード

ボーリング推進にまつわるエピソードは、全国各地に残っている。その中から一例を紹介したい。

● 替え歌…ボーリング悲歌（エレジー）

…長野

〔打合せ〕

1. 夕飯茶碗を前にして
推進班の点呼とり
何がなんでも1億と
推進班長の大訓辞

〔座談会〕

2. マッチやタオルの参加賞
どうやら大勢集まった

この説明が分かれ目と
熱弁振るう一年生

〔推進〕

3. 半日歩いて50万
つぎつぎ入る速報に
あせる気持ちの苦しさよ
付き添うおやじも憎くなる

〔悲歌〕

4. 家を離れて2週間
公会堂でゴロ寝して
窓辺に輝く星みれば
まぶたに浮かぶ子の寝顔

● 聴衆を惹きつける話術

「太く、長く、堅く、入ることが最も有効」

- ①部落座談会において、婦人層から大いに受けた話である。
- ②「太く＝大きな保障に、長く＝長期にわたって、堅く＝手堅く、入る＝加入する、ことが最も有効」と賢い共済加入の方法を説明したものであった。

● 熊本県のある宿屋の女中の話

「あの人たちの商売はなんだろうか。朝は暗いうちから出かけ、午後は昼寝して、夕方から三々五々いなくなり、夜の12時・1時頃帰ってくる。まさか、泥棒ではなかろうか。」

7. 結び

農協共済の草創期におけるボーリング推進（＝集中組織推進）について紹介してきたが、組合員組織が普及推進に果たした役割がいかに大きかったか、そして、ボーリング推進の中核が部落座談会であり、まさしく組合員教育の場（勉強会）であったということもお分かりいただけたかと思う。

部落座談会においては、自分の保障の状況

を話し始めると、お互いにその必要額や、今後の加入計画も出され、組合員相互で保障点検と加入計画が話し合われるという、協同組合として理想的な事例も全国各地で見られた。

農協共済の「普及」と「推進」の意味の違いはというと、「普及」とは、共済事業の理念を広く啓蒙することであり、「推進」とは、共済理念の普及を事業実績のうえで推進すること、すなわち、共済事業理念の実現のために行う協同組合運動の実践にほかならない。

ボーリング推進における部落座談会は、この「普及」と「推進」を同時に行った画期的なものであった。

今日の「LA推進」にあっては、LAと契約者という個人対個人の関係で推進が行われているが、当時の「ボーリング推進」のように、農協と組合員組織が一体となったひとつの組織運動としての推進について、もう一度模索・検討してみてもはどうだろうか。

現在のLA推進を見ていると、民簡保の募集活動と何ら違いがないように思えてならない。JA共済も、保険業法の縛りを受けるにしても、やはり「農協（JA）らしさ」「農協（JA）にしかできないこと」を追求すべきではなかろうか。

【参考文献】

- 全国共済農業協同組合連合会
『農協共済10年のあゆみ』
昭和36（1961）年
- 『農協共済発達史』本文編
昭和42（1967）年
- 『農協共済発達史』資料編
昭和43（1968）年
- 『全共連史：創立二十五周年記念』
昭和52（1977）年
- 『全共連三十五年史』本編・資料編
昭和62（1987）年
- 『全共連五十年史』本編・資料編
平成14（2002）年
- 各都道府県共済連編纂・発行による各年史
- 全国共友会
『農協共済草創物語—熱血の思い出—』
昭和58（1983）年
- 『40年代農協共済外史』
昭和61（1986）年